

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

【図書紹介】 『ニュートンの宗教』 フラ
ンク・E・マニユエル 著 竹本健 訳 法政大
学出版局 二〇〇七年

大貫, 義久 / Onuki, Yoshihisa

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007925>

【図書紹介】

『ニュートンの宗教』

フランク・E・マニユエル著 竹本健訳 法政大学出版社 二

〇〇七年

大貫 義久

この本（一九七四年出版）で著者マニユエルは、従来の狭い科学的アプローチを超えて、一七、八世紀イギリスの複雑な宗教事情をふまえながら、偉大な自然探究者ニュートンの、これまでふれられることのほとんどなかった宗教心情に迫ろうとしている。その試みは、狭い科学主義への反省がなされている今日において注目に値する。

万有引力を発見した大科学者ニュートンには、彼自身が意図的に隠していた精神生活があった。その精神生活を垣間みることで膨大な量の手稿が二〇世紀の半ばに陽の目を見、ニュートンの錬金術師の側面が経済学者ケインズによって明らかになったのだ。歴史上の大科学者が錬金術師でもあったという事実は、当時の人々に衝撃を与えた。しかし、ニュートンの隠された精神生活はそれだけに留まらなかった。他の手稿の束（今日ヤフダ文書と呼ばれているもの）が、新たに神学者としてのニュートンを明らかにした。今日人間から見れば、科学者とは相容れない宗教者ニュートンが見えて来たのである。このニュート

ンの神学者の側面に光を当てたのが、マニユエルであった。彼の著述から、宗教に対する驚くほど真摯なニュートンの姿勢が読みとれる。ニュートンによれば、人間には超越的神（形而上学的神でなく人格的な父なる神）そのものを知ることは決してできず、神の営為だけを、つまり「自然」と「聖書」を知ることができただけである。だから、神の意志を知ろうとするならば、物的自然界における神の営為（神による創造）についての研究と、聖書において言葉化された神の戒律の記録についての研究との、二つの道だけが開かれており、彼はその二つの道を真剣に歩んだのである。『ニュートンの宗教』では、このニュートンの聖書探究が紹介されている。ここでは、ニュートンの融和神学や反三位一体論の立場が明らかにされる。またさらに彼の、自然探究に対する宗教的な恐れや、聖書探究から分離されて自然探究だけが応用されていく当時の状況への危惧なども述べられており、大変に興味深い。特殊な内容だけに読みにくい部分もあるが、巻末に丁寧な訳注が施され、内容の理解を助けてかれている。近代ヨーロッパの形成に関心を持つている方には、分野を超えて、一読を勧めたい。